

モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目(2)

奥村真理子

II. イメージの刷り直し——自分自身のもの、自分以外のもの

本稿 I¹⁾においてわれわれはモンテーニュが、「脚力」(実行力)が弱くとも自分より遙かに優れた他者を認識し判断できる「視力」によって、他者と自己の「雲泥の差」を捉えていることを見た。ここでは他者同士の差異をモンテーニュがどのように捉えているか、その視線を追ってみよう。

1. 高さの違い、錯覚

モンテーニュが『エッセー』に入れる材料を「ダナイオスの娘たちのように絶えず汲み取る」(I, 26, V.S. p.146, C) プルタルコス『倫理論集』(アミヨによる仏訳)のなかに、対話篇仕立てのこんな話がある。登場するのはオデュッセウス、キルケー、キルケーの魔法で動物に変えられた仲間。神話では、オデュッセウスによって仲間たちはめでたく人間の姿に戻ったことになっている。ところがここでは、オデュッセウスがせっかく助けに来てくれたというのに、仲間の方は、「世界中で最も惨めで不幸な動物」²⁾である人間になど戻りたくない、動物のまま「あらゆる幸福に恵まれ、それを享受して生活」³⁾したい、と、オデュッセウスの救いを拒否する。彼は、動物であるにもかかわらずソクラテスばりの対話術まで用いて、動物が理性を用いること、動物の方が真の徳を備えていることを論ずる。この話は大層モンテーニュの気に入ったようだ。「レーモン・スポン弁護」のなかで大きく展開される動物と人間の比較は、この元人間だった動物の陳述を軸としてそれに『倫理論集』その他からの多くの素材を加えた、詳細かつ長大なアレンジだと言える。モンテーニュは、スポンが『自

然神学』で繰り返し論拠とした、人間—動物—植物—無生物という「自然の階梯」を、動物と人間の類似を示すことによって横倒しにし、動物の優秀さを論ずるその勢い余って危うく逆転させかねない⁴⁾。そのなかでモンテーニュは、あの動物のセリフの一つ《*je ne pense pas qu'il y ayt si grande distance de beste à beste, comme il y a grand intervalle d'homme à homme en matiere de prudence, de discours de raison et de memoire*》⁵⁾に想を得た、「人間と人間の差異は、動物と人間の差異よりも大きい *il se trouve plus de differance de tel homme à tel homme, que de tel animal à tel homme*」という考えを「常々私が支持していること *ce que je maintiens ordinairement*」として述べる (*D.M.* p.198; *V.S.* p.466)。このセリフはさらに、「われわれの間にある差異について」の展開の糸口となる。

Plutarque dit en quelque lieu qu'il ne trouve point si grande distance de beste à beste, comme il trouve d'homme à homme. Il parle de la suffisance de l'ame et qualitez internes. (...) A la verité je trouve si loing d'Epaminundas, comme je l' imagine, jusques à tel que je connois, je dy capable de sens commun (...) que j'encherirois volontiers sur Plutarque: et pense qu'il y a plus de distance de tel à tel homme, qu'il n'y a de tel homme à telle beste. C'est à dire, que le plus excellent animal est plus approchant de l'homme de la plus basse marche, que n'est cet homme d'un autre homme grand et excellent. (I, 42, *D.M.* pp.392—393; *V.S.* p.258)

この文章は明らかに「自然の階梯」を念頭においている。このように設定された垂直空間的距離のイメージが、この章の前半のいわば縦糸となる。また、テキストCでは《*C'est à dire*》以下が《*hem vir viro quid præstat; Et qu'il y a autant de degrez d'esprits qu'il y a d'icy au ciel de brasses, et autant*

innumerables》(V.S. pp.258—259) に換えられて、人間同士の差異の大きさをいっそう強調し、テキストAではもう少し後(D.M. p.396)で提示される地上から天空への距離を早々と示すことになる。優れた他者と自己の差を「雲泥の差」として捉えるモンテーニュの見方がここにも適用されている。それを地位や財産という人間社会の階層と突き合わせることによって、モンテーニュは、人間間の大きな差異が「その人自身のものではないもの」に基づいて評価されている、という問題に入っていく。そこでモンテーニュが数多くの素材を得て横糸としているのは、ダナイオスの娘＝モンテーニュのもうひとつの源泉セネカの『書簡集』である。

セネカは人間の価値を評価するにはその人自身の価値によって評価すべきであることを数々の書簡で繰り返し述べているが、そのうち、この章に最も文脈が類似しており多くの材料を提供しているのは第76書簡である。この書簡のなかでセネカは、いつものように若者ルキリウスを徳という「崇高なる善」へと進んで行くよう励まして次のように説いている。すなわち、「すべてのものの価値は、それら自体の善に基づく *Omnia suo bono constant*」(8)⁶⁾。鹿は足の速さによって、重荷を運ぶ駄馬は背中の強さによって、犬は野獣を追う足の速さ等によって評価される。人間の場合、それ自体の善は理性である。理性の完成によって人間は賞讃に値し、その本性の頂点に達し、幸福になる。この「唯一の善」以外はすべて賞讃に値しない。善い剣が剣帯や鞆の豪華さによって賞讃されるものではないのと同様、所有地の広さも利息収入の額も取り巻きの数も地位の高さも関係ない。高靴で闊歩する俳優が、舞台を退くと同時に履物を脱がされて自分自身の背丈に戻るのと同様、財産や名誉によって高い地位に上げられた者たちも真に偉大なわけではない。偉大に見えるのは、当人をその台座と一緒に測り、付随する装飾をも当人に付け加えるからだ。「人間の本当の評価」を行って、その人間がどういう性質かを知らうと望むときは、資産や名誉その他の運命が与えた「まやかし物」を取り去り、裸の当人を眺め、その心がどういう性質で、どのくらい大きいか、その偉大さは「借りもの」か、「自分のもの」かを観察すべきだ。「もし人が正しい眼をもって、きらりと光

る剣を眺められるならば、またもし心が、口を通して出ていこうが喉を通して出て行こうが、そんなことはどちらでもよいことが分かるならば、その人を幸福と呼ぶべきだ」(33)、と。

モンテーニュは、ほとんど「モザイク」⁷⁾のようにセネカからの借用を繋ぎ合わせ、その人間自身の精神と身体のあるりようによって優れた人間は王国や公国よりも遙か上方にあると書き進めていく。身体をも考慮に入れる点が肉体を魂の牢獄と見做すセネカと著しく異なるが、その人自身の価値による人間の評価の提唱も、動物の例も、剣の例も、靴の例も、像の台座の例も、衣服の例も、俳優の例も、『書簡』から借用されている。そればかりか、モンテーニュが王国や公国よりも上方に位置づける人間のありようの描写にも、セネカが真の評価に値する人間を描くために用いた表現が借用されている。

だが、このように多くの借用をしても、モンテーニュはこの人間評価のテーマをセネカとは異なるやり方で仕立てている。セネカは、人間の幸福の要件である理性の有無によって人間が動物と決定的に違うことを強調し、プルタルコスの方の話とは逆に、理性こそ人間に特有の善であり、これによって人間は、動物を追い越して神々の後を追い、幸福になれるが、動物は幸福になれないと断言する。

In homine optimum quid est? Ratio: hac antecedit animalia, deos sequitur. Ratio ergo perfecta proprium bonum est, cetera illi cum animalibus satisque communia sunt. (9)

Illud quoque dixeram, si bona sunt ea, quae tam homini contingunt quam mutis animalibus, et muta animalia beatam uitam actura: quod fieri nullo modo potest. Omnia pro honesto patienda sunt (...). (26)

人間が理性ゆえに動物より優るという考えを、プルタルコスは裏返して人間を

風刺するパロディーの下敷きとするが、セネカは若者に徳へと進むよう説き勧めるための論拠とするのである。他方モンテーニュは、プルタルコスという言葉が章の糸口となっていることにも示唆されているように、人間の価値を地位等で測る「われわれの習慣」が驚くべき例外であり、人間を評価するにも動物や物を評価する場合と同じように評価すべきではないか、という論に仕立てる。

Mais à propos de l'estimation des hommes, c'est merveille que sauf nous nulle chose s'estime que par ses propres qualitez. Nous loüons un cheval de ce qu'il est vigoureux et adroit, non de son harnois: un levrier de sa vitesse non de son colier: un oyseau de son aile, non de ses longes et sonettes. Pourquoy de mesmes n'estimons nous un homme par ce qui est sien? Il a un grand train, un beau palais, tant de credit, tant de rente: tout cela est autour de luy, non en luy. (D.M. p.393; V.S. p.259)

モンテーニュがセネカと異なるのはそればかりではない。セネカは、「人間の本性の頂点」へ、「崇高なる善」へと進むよう若者を駆り立てる。

Perge, Lucili, et propera, (...) propera, (...) 《Quantum, inquis, proficiam?》 Quantum temptaueris. Quid exspectas? nulli sapere casu obtigit. (5-6)

また、一つ前の第75書簡では、次のようにルキリウスに語りかけている。

《Ego uero, inquis, spero me posse et amplioris ordinis fieri.》
Optauerim hoc nobis magis quam promiserim: praeoccupati sumus, ad uirtutem contendimus inter uitia districti. (...) Exspectant nos, si ex hac aliquando faece in illud euadimus sublime et excelsum,

tranquillitas animi et expulsis erroribus absoluta libertas. (16-18)

本稿 I においてわれわれが見たように、モンテーニュも「小カトーについて」のなかで「泥」と「雲の高み」の対比を用いていたが、自らが「雲の高み」へと上ることを真似のできないこと、望むべくもないこととし、「上昇志向」をむしろ否定していた。同じくセネカとの類似が顕著な他の章を見ても同様のことが言える。セネカのストア主義が、超人的な賢者を描く厳粛なストア主義にエピクロス主義の要素を盛り込んだ、折衷的で寛大なストア主義であるとはいえ、その文章には、たとえば第76書簡では(18)～(19)に見られるように、崇高なるものと低俗なるものとの葛藤の末高みへと上る上昇や登攀のイメージが用いられている。セネカが称揚する徳による心の平静と、モンテーニュが死の考察(I, 20)や孤独の生活(I, 39)によって求める心の平安がいかにも似ており、セネカからのラテン語文の引用や、論理や表現の借用がどれほど夥しかろうとも、モンテーニュはそれらの章で「上昇」のイメージを用いていない。

それと同様この章においても、モンテーニュは「上昇志向」の表明へは向かわない。ここで示されるのはもっぱら、人間評価の際にわれわれの判断が「外的なもの」によっていかに「惑わされている」ということである。「いかに見るか」という判断の仕方が重点的に問題とされるのである。

c'est ce qu'il faut veoir, et juger par là les extremes differences qui sont entre nous. (...) Un tel homme est cinq cens brasses au-dessus des royaumes et des duchez. Il est luy mesmes à soy son empire et ses richesses. (...) Comparez à celuy-là la tourbe de nos hommes ignorante, stupide et endormie, basse, servile, pleine de fiebure et de frayeur, instable et continuellement flotante en l'orage des passions diverses, qui la poussent et tempestent, pendant toute d'autruy. Il y a plus d'esloignement que du ciel à la terre: et toutefois l'aveuglement de nostre usage est tel, que nous

en faisons peu ou point d'estat. Là où si nous considerons un païsan et un roy, il se presente soudain à nos yeux une extreme disparité, qui ne sont differentz par maniere de dire qu'en leurs chausses. Car comme les joueurs de comedies, vous les voyez sur l'eschaffaut faire une mine de duc et d'Empereur: mais tantot apres les voilà devenus valetz et crocheteurs miserables, qui est leur naïfve et originelle condition. Aussi l'Empereur, duquel la pompe vous esblouit en public, voyez le derriere le rideau, ce n'est rien qu'un homme commun, et à l'aventure plus vil que le moindre de ses subjectz. (*D.M.* pp.396—398; *V.S.* pp.260—261)

「レーモン・スボン弁護」でモンテーニュが「自然の階梯」を横倒しにし、危うく逆立ちにしかねないことにはすでに触れたが、ここでは、いわば「人間社会の階梯」を横倒しにしており、場合によっては逆さまにもなりうることを示している。そうすることによって、人間評価における「われわれの習慣の盲目性 *aveuglement de nostre usage*」を、「高さ」の錯覚を視覚的に示しているのである（《*c'est ce qu'il faut veoir*》; 《*il se presente soudain à nos yeux*》; 《*voyez*》; 《*esblouit*》; 《*voyez*》）。プルタルコスという言葉に想を得た人間間の天地の隔たりのイメージが縦系になり、セネカからの借用が横系になることによって、「人間社会の階梯」が横倒しにされ、同一平面に立った人間の高さの測り直しが必要となるのである（《*Comparez*》）。この章に多くの素材を提供したセネカの第76書簡の方は、モンテーニュがI, 20で大いに借用することになる、「来るべき災いに備えて自己を慣らし」、災いを「長い間の思考によって軽減」する賢者論で締め括られる。セネカは賢者の境地を目指すよう促しているのである。だがモンテーニュの方は、「幕の裏」の王侯たちに照明を当て続け、彼らが必ずしも幸福ではなく、むしろその高い地位ゆえに幸福を奪われていることを見せ、いかにわれわれの人を見る目と価値観・幸福観がその人自身のものではないものによって「眩まされて」「盲目」になっているかを

示し続ける。そして次々と征服を達成した後で安楽に暮らすと言うピュロス王と、彼に野心の虚しさを悟らせようとして、なぜ今すぐ安楽な生活に入らないのかと問うキュネアスとの会話を記した後、「各人の性格が各人の運命を作る」という言葉で章を締め括る。あくまでも価値観・幸福観における「われわれの習慣の盲目性」と別の見方とを対峙させるのである。

2. 飛翔の違い

英雄的精神を「雲居」に見出し、真に価値のある人間を「王国や公国の上方」に位置づけるモンテーニュが、優れた他者を飛翔のイメージで描くことは自然なことかもしれない。それが彼が子供の頃から愛好し尊んできた詩に関してであればなおさらだろう。なぜなら古代ギリシア・ローマ以来、優れた詩および詩人はしばしば飛翔のイメージで描かれてきたからである。モンテーニュの歎しい鑑賞眼が「最も完成された作品」(II, 10, *D.M.* p.104; *V.S.* p.410)と認める『農耕詩』の作者ウェルギリウスは、詩人としての決意を次のような詩句に込めた。

(...) *Temptanda uia est, qua me quoque possim
tollere humo uictorque uirum uolitare per ora.*⁸⁾

16世紀フランスでも飛翔のイメージは受け継がれる。それは特に不滅の名声というテーマに結びつき、プレイヤッド派の詩人たちに愛用される。实例は枚挙に遑がない。「プレイヤッド派の木陰は鳥人間でいっぱいになる」⁹⁾。ひとつだけ挙げよう。プレイヤッド派の首領ロンサルは1550年の『オード四部集』を、作品を完成して詩人としての不滅の名声を自負するホラティウスの『歌章』第3巻30に似た「おのがミューズへ」のオードで締め括るが、それにオウイディウスの『変身物語』の末尾を飾った飛翔のイメージを加える。

*Tousjours tousjours, sans que jamais je meure,
Je voleray tout vif par l'Univers,*

Eternisant les champs où je demeure
De mon renom engrésés et couvers:¹⁰⁾

したがって、古代から同時代に至る多くの詩に親しんだモンテーニュがウェルギリウスの詩句を雄大な飛翔のイメージで描くことは、詩の伝統と流行に沿った発想と見做すことができよう。だが、「自然の階梯」や「人間社会の階梯」をモンテーニュがそのままの形では用いないのと同様、飛翔のイメージもまた、不滅の名声を博する詩人の姿を描く役割から外れる。さて、モンテーニュがウェルギリウスの『アエネイス』を描くところを見よう。それはアリオストの『狂乱のオルランド』と対比されている。

Cette mienne conception se reconnoit mieux qu'en toute autre lieu en la comparaison de l'Aeneide et du Furieux. Celui-là on le voit aller à tire d'aisle d'un vol haut et ferme suivant toujours sa pointe, cetuy-cy voleter et sauteler de conte en conte, comme de branche en branche ne se fiant à ses aisles, que pour une bien courte traverse et prendre pied à chaque bout de champ, de peur que l'haleine et la force luy faille.

Excursusque breves tentat. (II, 10, D.M. p.108; V.S. p. 412)

《on le voit》—— 一鼓翼で飛んでゆく鷹か鷲のような高く雄大な飛翔と、枝から枝へと移る巣立ったばかりの雛か小鳥のような短い飛行の繰り返しという飛翔力の違いが、詩人の力量の差異として視覚的に鮮やかに対比され、モンテーニュの《conception》を読者に見させるものとなっている。

ところで、詩人の優劣を鳥の対比によって際立たせることもまた古代以来行われていた¹¹⁾。詩神アポロンの鳥という神話の影響もあって優れた詩人はしばしば白鳥と見做され、それに他の鳥が対照をなした。ウェルギリウスは『牧歌』の中で卑下する詩人に、自分の詩は美しい声の白鳥の間で騒ぎ立てる鶯鳥の声

のようなものだと語らせた¹²⁾。アリオストの方は白鳥と鳥を対比し¹³⁾、このモチーフはフランス詩人たちのお気に入りとなった¹⁴⁾。エラスムスは白鳥とカケスを対比した¹⁵⁾。いずれも16世紀フランス文学に大きな影響を与えた著者であり、彼らにモンテーニュが親しんでいたことは言うまでもない。したがって二種の鳥の対比という点でも、この飛翔のイメージは常套的モチーフのヴァリエーションの一つと見做すことができよう。

だがどうだろう。モンテーニュは、神話にも、鳥の姿にも声にも名前にもさえも言及していない。飛翔を可能ならしめる飛翔力と、飛び方という運動に焦点が絞られている。この点で類似している先例はホラチウスの『歌章』に見出される。ホラチウスは戦勝祝賀詩人の大役を辞退するために、ピンドロスを白鳥に、自分を蜜蜂に喩える。

Multa Dircaeum leuat aura cycnum,
tendit, Antoni, quotiens in altos
nubium tractus; ego apis Matinae
 more modoque
grata carpentis thyma per laborem
plurimum circa nemus uuidique
Tiburis ripas operosa paruus
 carmina fingo.¹⁶⁾

ちなみに、モンテーニュがあの一節で引用している短い飛行を歌ったウェルギリウスの詩句は、原文では嵐を前に遠出を控える蜜蜂の賢明さを示すものである。それを力不足の詩人に適用することで生じた、非力な詩人の労苦を蜜蜂の働き方に喩えるこのホラティウスの詩句との重なりは、古代の詩に通暁した当時の読者たちを喜ばせたであろう。だが、香草から香草へと飛ぶホラチウスの場合には推敲という努力をするのに対し、枝から枝へと飛ぶアリオストは力量不足を話の筋で補っている。同じような飛翔の対比でも、自分自身の力による飛

翔と自分以外のものに頼った飛翔との違いを表現している点で異なっている。

モンテーニュの同時代人たちはアリオストをウェルギリウスに肩を並べる詩人として比較していた。モンテーニュはそれを「野蛮な愚劣さ la bestise et stupidité barbaresque」(II, 10, *D.M.* p.105; *V.S.* p. 411) と評し、文章そのものの魅力によって読者を魅了する作家と、話の筋に頼る作家との違い、詩想の力に裏打ちされた詩句そのものの美を作り出す詩人と、気取りや凝った技巧に頼る詩人との違いを、様々な作者を引合に出して述べる。さらにそれに飽き足らず、舞踏における貴族の物腰・気品とダンス教師の軽業的な動きとの違いや、優れた喜劇役者の面白さと未熟な喜劇役者の奇を衒った面白さとの違いを喩えとして用いる。こうして色々な対比によって、自分自身の創意と筆力で傑作を書く作者と、「他からの助力 secours estrangier」(*D.M.* p.107; *V.S.* p. 412) に頼る作者がいかに違うかということ述べた末に、《cette mienne conception》が最も分かりやすい例として、『アエネイス』と『狂乱のオルランド』の対比を挙げたのである。

「われわれの間にある差異について」と同様の峻別がここでもなされている。あの章では、自分自身のものによって王国公国の上に位置する者と、自分以外のものによって偉大に見える者が峻別されていた。ここでは自分自身のものによって読者を魅了する作家と、自分以外の力に頼って読者の気を引き興味を繋ぎ止めようとする作家とが峻別されている。あそこでは価値を表す常套表現である高さのイメージを用いて高さの錯覚が示されていたが、ここでは、優れた詩人を描く常套のイメージである飛翔のイメージを用いて、飛び方の違い、飛翔力の違いが示されているのである。

自分自身のものに依る者と自分以外のものに頼る者というテーマは、モンテーニュにとって今後も重要な問題であり続ける。ダンスの喩えは 1588 年版においてさらに増殖し、「自然な歩き方」と「様々な体の動き」の対比が加えられる。また、脚力がないから馬に乗るという喩えも追加される。他方、飛翔の対比は初版のままである。飛翔のイメージはモンテーニュの表現意欲をあまり掻き立てなかったのか。ロンサールの場合、語彙索引に動詞 voler に関する記述

が250以上あるというのに¹⁷⁾、『エッセー』の場合、名詞 vol を含めても使用頻度は15にすぎない¹⁸⁾。だが、数字だけで文学作品に関する判断を下すわけにはいきまい。もう少し飛翔のイメージの使用例を見てみよう。

3. 侮蔑の目、羨望の目；飛翔と地上走行・歩行

ウェルギリウスとアリオストの比較によく似た飛翔のイメージが「友情について」に用いられている。モンテーニュがラ・ボエシとの友情を最も崇高に情愛と哀惜を込めて叙述した章である。モンテーニュは友情を次々と他の交際と比較し、友情が最も優れたものであると述べていくのだが、恋愛との比較において友情を飛翔させる。他方、恋愛は狩猟のイメージで描かれる。恋愛を狩猟に喩えること自体はペトラルカをはじめ多くの詩人が用いたイメージだが、モンテーニュはアリオストの『狂乱のオルランド』から兎を追い掛ける猟師に恋愛を喩えた詩句を引用しこれを利用して、狩猟する恋愛と飛翔する友情を組み合わせる。語られるのは、追いかけるばかりの情熱、獲物を捕らえてしまえば消えてしまう「気紛れな炎」である恋愛と、互いの交流によって向上、増殖、増大し続ける「穏やかな熱」である友情とを、モンテーニュが同時に体験していた時のことである。

Sous cette parfaite amitié ces affections volages ont autrefois trouvé place chez moy: (...) Ainsi ces deux passions sont entrées chez moy en connoissance l'une de l'autre, mais en comparaison jamais: la premiere maintenant sa route d'un vol hautain et superbe, et regardant desdaigneusement cette cy passer ses pointes bien loing au dessous d'elle. (I, 28, D.M. p.260; V.S. p.186)

ひたすら邁進し続ける恋愛と、悠々と飛翔しながらそれを「侮蔑」して遙か下方に見ている友情。恋愛と友情の違いが簡潔に表現されている。しかも、モンテーニュにとってそれらがどのようなものであったかがよく分かる。若い頃は

けっこう恋愛に熱しやすかったことをモンテーニュは『エッセー』の幾つかの箇所では告白しているが、それがよく表れている。またそれ以上に、敬愛して止まないラ・ボエシとの友情がいかにモンテーニュの心のなかで尊いものであったか、その記憶がますます尊いものであり続けているかが読む者によく伝わってくる。ウェルギリウスとアリオストの違いと同様、行き方の違い、運動のありようの違いが出ている。さらにここでは、飛翔する者の下方への侮蔑の視線が、両者に対するモンテーニュの見方の違いを雄弁に物語っている。この「飛翔する者」と「侮蔑の目」のイメージの刷り直しが行われるのが、「術学について」である。

喜劇でも世間でも不名誉な馬鹿者扱いを受けている学校の先生を弁護して、判断力・学識において類稀で優れた人々と俗衆とは生き方が違うのだから、という理由を挙げていたミシェル坊やに論拠を失わせたのは、最も判断力のある人々こそ最も学者先生たちを「軽蔑」しているという事実だった。以後学識のある人々がなぜ賢明にならないのかという疑問を抱いたモンテーニュが「術学について」の章でその原因を探る。モンテーニュはまず、学識が精神の働きを妨げるという原因を考えるが、昔は実践と学識の両方に卓越した人々がいたという反証がすぐさま思い浮かぶ。モンテーニュは、昔の哲学者たちに対する人々の「軽蔑」が「羨望」の裏返しだったのだと、「軽蔑」を「羨望」に読み替え、「羨望」された昔の哲学者と「侮蔑」される今の術学者を対置する。

Et quant aux philosophes retirez de toute occupation publique, ils ont esté aussi quelquefois à la verité mesprisés par la liberté comique de leur temps: mais au rebours des nostres. Car on envoie ceux là comme estans au-dessus de la commune façon, comme mesprisans les actions publiques, comme ayant dressé une vie particuliere et inimitable, réglée à certains discours hautains et hors d'usage: ceux cy on les desdeigne comme estans au-dessous de la commune façon, comme incapables des charges publiques

comme trainans une vie et des meurs basses et viles apres le vulgaire. (I , 25, *D.M.* pp.169—170; *V.S.* pp.134—135)

「普通のあり方の上」にあり、公の活動を「軽蔑」し、「高邁な思想に則り世間の風習から外れた独自の真似のできない生き方を打ち立てた」羨望された昔の哲学者と、「普通のあり方の下」にあり、公の職務に「無能」で、「俗衆の後を低く卑しい生き方と暮らし振りを引きずる」侮蔑される今の術学者とが、《comme》の繰り返しによって明白な対句を用いて描かれ、両者のありようが対照されている。テキストCでは《mesprisez par la liberté comique de leur temps》の後に昔の哲学者がどのような点で侮蔑されていたかがプラトンの対話篇を利用して詳細に叙述され、《mais au rebours des nostres. Car》が《Ainsi les desdeignoit le vulgaire, comme ignorants les premieres choses et communes, comme presumptueux et insolents. Mais cette peinture Platonique est bien esloignée de celle qu'il faut à noz gens.》(*V.S.* p.135, C) となることで、侮蔑された哲学者の俗事への軽蔑という逆転はさらに大きくなる。

さて、「俗衆の後を低く卑しい生き方と暮らし振りを引きずる」という表現は、昔の哲学者の「高さ」と対照されることによって「低さ」のイメージを出すとともに、「打ち立てた」と運動の対照をなしているが、次いで登場する、高邁な昔の哲学者が実践においても並外れて有能だったことを描く飛翔のイメージと、さらに強い運動の対照をなすことになる。アルキメデスは機器製作を学術の「品位 dignité」を損なうものだと「侮蔑していた *desdignant*」にもかかわらず国を守るために驚異的な兵器を製作した。そのように、彼らが実践において「高い飛翔をするのを人々は見た」のである。

Aussi eux, si quelquefois on les a mis à la preuve de l'action, on les a veu voler d'un'aile si haute, qu'il paroissoit bien leur cœur et leur ame s'estre merveilleusement grossie et enrichie par l'intelligence

des choses. (*D.M.* pp.170—171; *V.S.* *ibid.*)

また、彼らは自分が運命や世界の遙か上方に位置していると考えていた。

Mais leurs imaginations logées au dessus de la fortune et du monde leur faisoit trouver les sieges de la justice et les thrones mesmes des roys bas et viles. (*D.M.* p.171; *V.S.* *ibid.*)

このように高邁な思想によって俗事を「見下す」昔の哲学者の、思想と実践の両方における「高さ」がまず強調される。次いで、俗事における有能さが「下ろす」という言葉で表現される。

Il luy print envie par passetemps d'en montrer l'experience, et ayant pour ce coup ravalé son sçavoir au service du proffit et du gaing, dressa une trafique, qui dans un an raporta telles richesses, qu'à peine en toute leur vie les plus experimentés de ce mestier là en pouvoient faire de pareilles. (*D.M.* *ibid.*; *V.S.* pp.135—136)

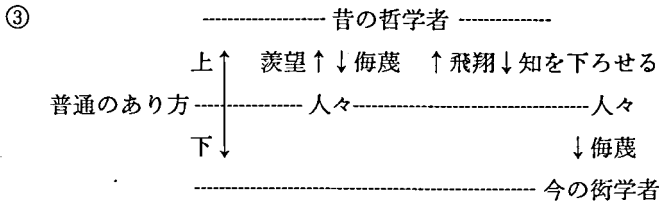
知を「下ろした」のはタレスである。俗事を軽蔑するタレスが天文学に熱中し、空ばかり見つめていて溝に落ちたとき、足下にあるものさえ見えないのに天のことを知ることができるのですか、と冷やかされた逸話は当時非常に流布しており¹⁹⁾、モンテーニュはこれを「レーモン・スボン弁護」で用いている(II, 12, *V.S.* p.538, A, C)。その彼が自ら商売をして莫大な財産を成してみせることで金儲けのたやすさを示したというこの逸話もまた有名な話である²⁰⁾。それをモンテーニュはここで「下ろす」という言葉を用いて表現している。学問のみならず実用にも並外れて有能であることを表すイメージが飛翔から下降に刷り直されているのである。天空を見つめるタレスのイメージが有名であるだけに、この下降のイメージは効果的である。

さて、ここまでを侮蔑の関係を中心に概略してみよう。冒頭で提示された

① 喜劇・われわれ・俗衆・最も判断力のある人々—(侮蔑)→哲学者
という侮蔑の関係に対して、昔の哲学者に関する

② 喜劇 (C:・俗衆)—(侮蔑)→哲学者

という同様の関係が提示されるのであるが、ただちに②の侮蔑が羨望に読み替えられ、逆に哲学者たちの方が侮蔑する者と見做され、彼らと今の哲学者の正反対のありようが対照されることによって、両者は上下対称に置かれる。



同じように侮蔑されていたはずの昔の哲学者と今の哲学者が大きく隔たり、しかも前者は「普通のあり方」のレベルまで知を下ろせるのである。今の学者が賢明にならないことについてモンテーニュが考えた、学識が精神の働きを妨げるという原因は、実践において並外れた能力を発揮した昔の哲学者のこのような描写を経て否定される。それでモンテーニュは別の原因を考える。そこでもまたイメージの刷り直しが行われる。

モンテーニュが次に考える原因は、学問の仕方が悪いという原因である。つまり、記憶ばかりが満たされて判断力や徳が養われていない、知識が「自分自身の知恵 *nostre propre sagesse*」とならず「他人の知識 *sçavoir d'autrui*」(*D.M. p.175; V.S. p.138*)にとどまっている、ということである。「われわれの間にある差異について」において真の高さの差異を生じさせ、また詩人の対比において飛翔の違いを生じさせていた、「自分のもの」対「自分以外のもの」という峻別が、学問について行われるのである。だが、ここでは高さや飛翔の違いで描かれるのではない。哲学者はすでに「普通のあり方以下」として位置づけられると同時に「俗衆の後を低く卑しい生き方・暮らし振りを引きずっている」と表現されていた。それが、学問における「自分のもの」対「自分以

外のもの」という峻別を経て、同じく地上を行く俗衆と対照的な銜学者の行き方として描き直される。

Mon vulgaire Perigordin les appelle fort plaisamment *Lettreferits*, comme si vous disiez *lettreferus*, auxquels les lettres ont donné un coup de marteau, comme on dict. De vray le plus souvent ils semblent estre ravalez mesmes du sens commun. Car le paisant et le cordonnier vous leur voyez aller simplement et naïvement leur train parlant de ce qu'ils sçavent: ceux-cy pour se vouloir eslever et gendarmer de ce sçavoir, qui nage en la superficie de leur cervelle, vont s'embarrassant, et empetrant sans cesse. (*D.M.* pp.175-176; *V.S.* p. 139)

銜学者たちは高ぶろうと欲するのだが、そのためにかえって絶えず躓いている。《s'eslever》の原義「上る」がここで生きていることは無論であろう。彼らは「高い飛翔」ができないどころか、上昇しようとするために、つまり「脳の表面に浮いている」「他人の知識」で鎧い、偉そうに振る舞おうとするがゆえに、動きを妨げられている。これに対し農夫や靴職人は「彼らが知っていること」、つまり「彼ら自身の知恵」になった事柄についてのみ話すから「単純素朴に進んで行く」。こうして「銜学について」の章は、教育において知識よりも判断力や徳の養成がより必要であることについて論を展開していく。

したがって、

④ 躓いてばかりいる銜学者〈対比〉単純素朴に行く農夫・靴職人
という、いずれも地上にある者たちの、行き方・運動の対比が成り立つ。「自分自身の力」で飛ぶウェルギリウスと「自分以外のもの」に頼って飛ぶアリオストの飛翔の違いが、ここでは地上での歩行の違いに刷り直されている。あの一節の前にテキストBで加えられた、ダンスにおける「自然な歩き方」のイメージの萌芽がここに見られる。この「歩行」のイメージはモンテーニュにとって

重要なものとなる。

「高い飛翔をして見せた」昔の哲学者の俗事への侮蔑において、「高い飛翔を保つ友情」の「地上を邁進する恋愛」への侮蔑と同様の高さと同様の方向性を持っていた侮蔑の視線はどうなったのか。銜学者たちは、知を「下ろした *ayant ravalé*」タレスとは逆に常識の下にいる (*《estre ravalez》*)。だが、躓きながらではあるが地面を行っている。章の冒頭で提示された「喜劇・われわれ・俗衆・最も判断力のある人々(侮蔑)→銜学者」という侮蔑の視線をこの一節に重ね合わせるならば、常識以下ではあるが同じ地上を躓きながら行っている銜学者への侮蔑の視線となろう。しかし、ここで見ているのは「あなた方」— *《vous leur voyez》* — 『エッセー』の読者である。この章のなかで上空の高みに位置するのは高邁で学問と実践の両方に卓越した昔の哲学者たちだけである以上、「あなた方」が彼らと同じでないかぎり、もはや上空の高みからの侮蔑の視線をここに読み取ることはできない。

モンテーニュは既成のイメージを利用して、それを刷り直す。既成の人間社会の階梯は横倒しにされ、別の高さの基準が提示される。飛翔のイメージは飛翔力・飛び方の対照をなし、さらに地上走行あるいは歩行のイメージと対照される。彼にとっては、高さそのものよりも、何によって高いか、どのように飛んでいるか、行っているか、という違いの方が重要なようだ。それは、その人間が「自分のもの」によっているか、それとも「自分以外のもの」によっているか、という峻別に由来しているのではないだろうか。どこまで到達したかという結果よりも、行き方そのものを彼が重視するからではないだろうか。

(続く)

註

- 1) 「モンテーニュ、見上げる目、見下ろす目(1)」、『広島大学文学部紀要』第55巻、1995, pp.138-158. 『エッセー』からの引用については同稿註2を参照されたい。
- 2) *Que les bestes brutes usent de la raison*, in *Œuvres de Plutarque*, traduites du grec par Jacques Amyot. Jean-François Bastien, 1784, tome XI, p.4.
- 3) *Id.*, *ibid.*

- 4) Cf. A. Tournon, *Montaigne, la glose et l'essai*, Presses Univ. de Lyon, 1983, p.238; R. Esclapez, 《L'échelle de nature dans la *Théologie naturelle* et dans l'*Apologie de Raimond Sebond*》, in *Montaigne, Apologie de Raimond Sebond, de la Theologia à la Théologie*, Champion, 〈Etudes montaignistes VI〉, 1990, pp.201—226.
- 5) Plutarque, *op. cit.*, p.25.
- 6) Seneca, *Epistulae morales*. 原文は *Senèque, Lettres à Lucilius*, texte établi par F. Préchac, Les Belles Lettres, 1989 により、和訳は『セネカ道徳書簡集』、茂手木元蔵訳、東海大学出版会、1992 によった。
- 7) P. Villey, *Les Essais de Montaigne*, P.U.F., 3° éd., 1978, t.I, p.258.
- 8) Vergilius, *Georgica*, III, 8—9.
- 9) Cf. F. Joukovsky, *La Gloire dans la poésie française et néolatine du XVI^e siècle*, Genève, Droz, 1969, pp.330—339 (引用文は p.334).
- 10) Ronsard, *A sa Muse*, vv. 9—12 (*Œuvres Complètes I*, Gallimard, 〈Bibliothèque de la Pléiade〉, 1993, p.926, p.1584).
- 11) Cf. F. Joukovsky, *op. cit.*, pp.336—337.
- 12) Vergilius, *Eclogae*, IX, 36.
- 13) Arioste, *Orlande furioso*, XXXV, 20—23.
- 14) A. Cioranescu, *L'Arioste en France*, Presses Modernes, 1939, I, pp.250—252.
- 15) Erasmus, *Adagiorum chiliadis tertiae centuria*, III, 97.
- 16) Horatius, *Carmina*, IV, II, 25—32.
- 17) A. E. Creore, *A Word-Index to the Poetic Works of Ronsard*, Leeds, W. S. Maney and Son Ltd., 1972, t.II, p.1496 sq.
- 18) R. E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne*, Genève, Droz, 1981, p.1334.
- 19) Cf. *Les Essais de Michel de Montaigne*, t. IV (II), *Les Sources des Essais* par P. Villey, Pech, 1920 (Olms, 1981), p.254.
- 20) Cf. *Id.*, *ibid.*, p. 70.

Montaigne, regard vers le haut, regard vers le bas (2)

Mariko OKUMURA

II. Modification des images

—《ce qui est sien》et 《ce qui n'est pas sien》—

Comment Montaigne connaît-il et exprime-t-il la différence entre les hommes? Sous cet aspect nous considérons ici sa manière de voir.

Il utilise et modifie l'image stéréotypée de la hauteur. Dans le chapitre 《De l'inegalité qui est entre nous》il montre 《l'aveuglement de notre usage》dans l'estimation des hommes, en opposant la véritable hauteur de celui qui est grand par ses propres qualités à la fausse hauteur des rois et des princes qui paraissent grands par 《ce qui n'est pas leur》. Il place ainsi en position horizontale l'échelle sociale comme il fait pour 《l'échelle de nature》en montrant la ressemblance entre l'homme et les animaux dans l'《Apologie de Raimond Sebond》.

Il fait de l'image de l'envol du poète glorieux et immortel, employée de l'Antiquité à la Pléiade, l'image des vols contrastés en tant que mouvements. Il distingue deux sortes de poètes dans le chapitre 《Des livres》: poète qui vole haut par sa propre inspiration poétique et celui qui, ayant besoin de 《secours estrangier》, volette et sautille de récit en récit.

De plus il oppose l'image de la course à l'image du vol. Quand il met l'amitié en comparaison avec l'amour dans le chapitre 《De l'ami-

tié》, la course de l'amour en chasse fait contraste avec le vol hautain de l'amitié qui le regarde dédaigneusement.

Tous ces éléments constituent la distinction entre le pédant et les autres hommes dans le chapitre 《Du pédantisme》: images de la hauteur, du vol et du regard dédaigneux, contraste de deux mouvements et distinction entre 《ce qui est sien》 et 《ce qui n'est pas sien》 de l'homme. Montaigne, à la recherche de la cause de la bêtise des faux savants contemporains qu'on dédaigne, les compare d'abord avec les philosophes enviés de l'Antiquité. La hauteur de la manière de vivre des philosophes, leur haut vol dans l'action et leur dédain des actes publics sont en complète opposition avec la bassesse et l'allure traînante de la façon de vivre des pédants et leur incompétence dans les charges publiques. Puis, ils sont mis en comparaison avec le vulgaire. Le vulgaire va à l'allure simple et naïve 《parlant de ce qu'il sait》, alors que les pédants vont à l'allure empêtrée dans le 《savoir d'autrui》 qui n'est pas devenu 《leur propre sagesse》. Ainsi Montaigne s'aperçoit que la bêtise des pédants provient de leur mauvaise façon d'aborder les sciences.

Quand Montaigne connaît et exprime la différence des hommes, il fait des images conventionnelles de la hauteur et du vol les images des hauteurs, des vols et des mouvements en contraste. C'est parce qu'il distingue 《ce qui est leur》 de 《ce qui n'est pas leur》, et qu'il fait grand cas de leur allure, de leur manière de faire et de vivre.

(à suivre)